

私の軍歴

福岡県 塚 俊雄

一 徴兵検査より入隊まで

私は昭和十六（一九四一）年、中等実業校五年を卒業しました。当時、世の中が戦争一色で兵隊、海軍のあこがれ時代で、学校では軍事教練があり、当時軍より配属将校として赴任した天河中尉の下で厳しい訓練を受けました。私は姉兄妹の四人兄弟でした。兄はちよっと人様より背が低くて軍隊向きではありませんでした。

そのころ田舎の農家のほとんどが出征軍人のある家庭でした。私は学校を卒業して三井の軍需工場に入社した、職員見習いでしたが、突然親の許可なく、よしし自分も軍人の家として奉公出来ることを考え兵隊に志願したところ、昭和十七年に甲種合格でした。

翌年一月、久留米第五十一部隊（野砲兵）へ入

隊しました。後で知りましたが、我々は満州の部隊要員として一期の検閲が終わり次第渡満することを知りました。

二 入隊初年兵より久留米、満州へ

満州より初年兵引き取りに来ている現役の上等兵殿より早速、厳しい初年兵教育が始まりました。部隊は仮兵舎のバラック建物で、内務班が決まり砲手班、御者、通信、観測に分けられ、自分は砲手班でした。

第五十一部隊は久留米の高良台の演習地の一角にあり、ここは九州中等学校の秋季演習で配属将校と共に軍事教練に参加した懐かしい思い出の土地でした。軍の特科隊が並ぶ隣りが予備士官学校で、直ぐ隣りは騎兵隊でした。

新鮮な起床ラッパに起こされ本格的な軍隊生活の始まりでした。先ず食事前の馬の手入れ掃除、砲の手入れ、十センチの榴弾砲でした。鉄の車輪で見事な大砲でした。毎日先任の上官から砲の部品の名称と手入れ法を、砲に最敬礼して受けました。

そして砲術の訓練で毎日の教育に目がくらむくらいでした。特に冬空の下での教育は何ともいえない厳しさでした。あのころの慣れない初めての馬の足洗いは、今も忘れられない辛い日課でした。

田舎の農馬と比べられないくらい大きな馬で、手入れにはそれは大変な作業でした。

一日の初め、この教育がすむと、毎晩の様に点呼時に行われる軍人勅諭の一人ずつの教育は、初年兵の一番の苦手な夕べでした。しかし皆カッポ（顔をたたかれること）をやられる時が多かったけれども、土曜の夕方たまに開かれる慰安の夕べは、厳しい訓練を忘れさせる楽しい一場面でした。特に歌の上手な初年兵には最高の場でした。そして訓練と「カッポ」と血の涙が出るような一日の繰り返しでした。

一カ月が夢のごとく過ぎて、お互いの過去を語り合う機会もあつて、初年兵同士も互いに気持を知り合い、日曜ごとの家族の面会も何よりの最高の喜びとなりました。そして我々の面会時の差し

入れは何ともいえない有り難さでした。

内務班は三班で、下士官の先任で城島軍曹殿と御者班の班付の古瀬軍曹殿と古川上等兵（十五年兵）三ヶ島一等兵（十六年兵）の三人の優秀な先任ばかりでした。そして内務班古川、三ヶ島殿とは日曜ごとに営内で記念写真などを撮り、これは今でも時々見て、昔の軍隊時代の思い出として大切にしているところです。また今でも手に赤切れの出来たことのない私には面会の時、母が心配してくれた事が忘れられない思い出でした。

一番親しかった佐賀の大林、八女の一瀬（死去）、直方の梶原（死去）そして自分と、四人は幹候の仲良しメンバーでした。三月が来て第五十一部隊の一期の検閲を受け、いよいよ満州へ行く日が決まりました。営内の桜も満開で我々の門出を見送ってくれました。各人が新品の純毛の軍服に着替え、軍靴も新品で、その初年兵振りに話に花が咲き、第五十一部隊兵舎より荒木駅まで行軍でした。

駅に着き汚れて汚い貨車に詰め込まれました、

貨物同様の扱いで門司港駅に着き、関釜船で釜山港に着き、関門を経由してソ満国境の牡丹江城子溝に着きました。お互いが汚い顔で汚れていました。駅に着いたとたん赤と白の饅頭が配給され、今でもあの時の空腹時に食べたおいしさは忘れません。城子溝の大きな思い出になりました。

そこで満州牡丹江東寧の第二二部隊第三中隊要員となり、それぞれ内務班に分かれ、本格的な軍隊生活の始まりでした。その時、関東軍の一員になったことを中隊長から訓示されました。それから毎日の訓練は防寒帽に防寒外套での耐寒訓練は厳格でした。しかし何といっても指先の冷たさはこらえきれませんでした。時々馬術の訓練で立派な軍馬に乗馬した姿は見事でした。よく馬も進んでくれました。

また炊事当番の食器洗いは北満のみしかない現象でした。アルミの食器がピツタリと手先にくっつくのは内地では想像されないことでした。訓練後の初年兵には食器一杯の食事では足らずに、満

腹にはほど遠い夢でした。また夜の不寝番の当番に当たり、皆が寝ている時に完全武装で任務につき、中隊内部を一周して窓辺を見ると、北満のほのぼのとした薄暗い寒風の中、お月様が皓皓と冴えている時など、内地のおふくろのことを思い出して涙ぐみ、哀愁を感じさせられる時もありました。

そして軍務教練に耐え切れず逃亡する兵隊もあり、捕らえられれば直ぐ重労働に入れられ厳罰、国賊扱いで、そんな者もいました。本当に御国のためとはいえ、皆一致団結を要求される兵士の心得は、その時の若者の心髄でした。カッポと鍛練の毎日でした。

久留米と同じく、食事前の馬舎の手入れと砲手としての砲の手入れは、厳寒の満州ではひとしおのものでした。零下三〇度以上の空風の吹きすさぶ風雪のソ満国境の風は、何ともいえない冷たさでした。とても久留米と比較されないものばかりでした。景色とて真白な小高い山は周り一面の粉雪に包まれ、兵舎と馬小屋だけのあの木枯らしの

ソ満国境は軍隊生活のみでしか味わえないもので、とても人間生活とは思えない土地でした。建物は赤レンガ造りで山の谷間に兵舎と馬小屋があり、第一大隊より東に第四大隊まで並び、さすがに広々とした満州台地でした。教練が終わり班長が引率しての入浴でした。しかし一日の疲れを休ませるといふゆつくりした入湯はとも出来ず、大変な慌しいひとときでした。

それから古年兵の銃剣の手入れ、軍靴の手入れと、これこそ初年兵の泣き場のひとときでした。特に北満の赤土は軍靴にくっついて離れず、これこそ初年兵の大きな苦勞の種でした。夕食後は久留米の時のように一人一人点呼で泣かされました。渡満して直ぐ新品で着て来た軍服はぬがされ、ボロ軍服を支給され、軍服を体に合わせろといわれ、それはとてもあわれな姿となりました。皆ズボンの破れの補修に当て布をして裁縫をしました。糸、針、ハサミは一人一人の携帯備品で、今までしたことのない初経験でした。うす暗い予備室で

は中々針の目が糸を通してくれませんでした。

第三中隊の内務班班長は伍長殿で、下士官学校を卒業後のとても張り切った元気のある大野朝三でした。そして先任の十五年兵の三原兵長殿は、よく指導力がある思いやりのある先任でした。今でも文通している尊敬出来る人でした。一期の検閲が終わり直ぐ中学卒者には幹候の試験があり、中隊より四人合格しました。

食事前の馬の手入れ、馬舎の仕事としての水くみだけは初年兵の役でした。しかし零下三〇度以上の厳寒の井戸は周囲が氷付き、大きな井戸でも氷ついて一斗桶がやっと入れるくらいで、内地とは比較にならない北満の厳しい寒さでした。

軍馬は朝夕必ず給水の励行で、その作業は決して楽ではありませんでした。特に幹候生になり一段と内務班の先任の指導が厳しく「貴様達はいずれ上官の卵だ」からといって、カツポを激しくされ、他の初年兵以上に無理な教えばかりでした。上等兵に進級した時、襟章の三つの階級星の横に

金属の真中に陸軍の星のある座金（候補生のバッチ）を付けさせられ直に候補生と分かるようになりました。以後は「堺候補生」と呼ばれ、その扱いを受けました。

内務班の出入時は「どこに何しにゆく」と大きな声で申告、報告が実行されました。軍隊ではトイレのことをカワヤといいます。

幹候生では一通り観測、通信、乗馬、砲手の姿勢をそれぞれ大隊本部の教官から指導されました。伍長に任官して自分専用の乗馬をもらい本当に有り難く胸いっぱいでした。栗毛色でとても自分になつて家族みたいでした。しかし、その後の動員下令で出発する時はとても悲しく、愛馬への思いがこみあげて別れがつかつたものです。

軍隊では乗馬も運馬も名前を持っています。馬舎の入口にはそれぞれ大きな字で名前が付けてあり、馬も自分の床を忘れず、それは人間より利口でした。私も馬からよく教えられました。

教練の後は久留米と同じく軍歌の練習で大変で

した。初めて歌う軍隊歌は「露宮の唄」「愛馬行進曲」「日本陸軍」「戦陣訓の唄」「麦と兵隊」他にまだありましたが、今でも哀愁のある「綏芬河小唄」は忘れられません。最初古参兵殿が歌って、直ぐ後を歌わせられ、何回も何回も繰り返して、大声で歌わんとこれまた気合いを入れられ、覚えが悪いとカツポでした。

今でも脳裏にしみ込んでいるのは、軍隊は星一つの差が物をいい、自分達は幹候のお陰で直ぐ進級し、敬礼される身になり有り難かつたのですが、しかし逆に責任があり、部下を指導する教育が厳しく要求され、指揮のむずかしさに、努力に努力が必要でした。

三 動員態勢・台湾上陸

昭和十九年六月二十日、突然動員下令で独立野砲第五大隊が編成され、私は第三中隊になり中隊長は藤田少尉でした。私は幹候の教育真つただ中に分隊長の命を受け、びっくりして責任の重さと、果たして自分に分隊長の任務が遂行出来るか不安

でした。

しかし大和町から先任で来ていた（十五年兵）

甲斐田軍曹殿が第一分隊長でいまして随分と助かりました。班員の編成、分隊の骨組みの結成に懸命でした。そして直ぐ部隊は出発準備に入り、九〇式の野砲の新兵器を受領に行きました。昭和十九年六月二十四日、「二〇榴」と少し違ってタイヤの車輪で、砲身がすごく長く見事な大砲でした。不安ながら命のまま分隊長として部下の掌握と第二分隊を率いることとなり、間もなく東寧より釜山へ移動、釜山に着いてオイル交換と第一分隊と釜山港にて実弾による試射をしてみました。

その時の射程は十キロくらいでした。昭和十九年七月二十九日、釜山港を「白山丸」にて出港しました。「九〇」の野砲の牽引車には各分隊に運転手と助手二人が配属になりました。しかし直ぐ牽引車といすゞのトラックと交換され、砲列配置はこのトラックにてする様命を受けました。運転手は上等兵の二人で、いずれも上方出身で言語が明

瞭ではなかった。釜山では一カ月余り乗船の来るのを待ちました。

基隆に着いて、北満の荒涼とした台地より来て見た基隆の港は華やかでした。人の出入、そして港が活気づいていて戦争中の土地とは見えず、何となく平穏でした。街にはパインのジュースが市販されていて、兵隊は皆買って飲みましたが、そのおいしさはいまだに忘れられない飲み物でした。直ぐ汽車に砲とトラックを積み込み、移動態勢

に入り、そして部隊も一緒に汽車に乗り基隆港を出発しました。新竹州に入るころ、河の中に大きな動物がいて何だろうと皆びっくりしましたが、後で分ったのですが水牛でした。汽車は嘉義に着き、ここで先ず大砲を大事に降し、そして目河廠会にたどり着きました。これからが台湾の駐屯の始りでした。

四 白河厰舎にて

兵舎の一角にはアメリカ兵の捕虜が数百人抑留されていました。土曜日になると珍しい楽器で皆

賑わって、日本兵とは比較にならない体格揃いでした。入口の衛門を出て直ぐ小高い山がありました。この坂道を皆で砲を押し上げる訓練は大変でした。この山こそ我々砲兵の演習地にはびつたりの丘でした。小隊長八尋少尉の指揮で実地演習に入りました。天気は晴れ上がり日々かんかん照りつける日でした。

小隊長の命で我が分隊も「照準点、前方」と大きな号令で操作しようとした時、ロッキード米機が急降下、我々の砲の上を猛スピードで機銃掃射して来ました。その時自分は即座に「全員砲の下に伏せろ」と号令しました。米機はそれからもう一度旋回して襲撃するかと用心していましたが幸い来ませんでした。それから砲列をとき兵舎に急いで帰りました。しばらくして台南方面よりB 29が群をなして空一面に現われ、製糖会社を目標に爆弾投下の開始でした。もうもうと黒煙が空に舞い上がりあわれな状態でした。急いで砲を定位置に隠して甲斐田分隊長と手を握り無事を喜びまし

た。これは台湾の実践の一つでした。

また台南地方の陸地構築ではどの陣地でも苦勞ばかりでした。先ず山の地形により砲をかくす横道を掘るのが大変でした。台湾の山の赤土は固くて、先ず鶴嘴で崩して運び出す作業では、いつも第一分隊と競争でした。しかし我が分隊には直方から来ていた緒方一等兵が炭坑勤務経験者だったようで、とてもプラスになり戦力になりました。もちろん、外の者も頑張りました。

また九曲堂当りで台湾人の女性達が勤勞奉仕で毎日交代で数十人応援してくれました。年ごろの娘達で休憩ばかりして仕事は決して能率はあがらず、台湾語で兵隊の悪口をいい、外では日本語で話していました。

そのころ、台湾人の初年兵も入隊して来ました。ある日中年の男性が大きな大蛇を首に巻いて、兵隊さんと言って見せに来たこともありました。一瞬びっくりでしたがその男性は「この蛇はどうもしないよ。おとなしいよ。毒はない」と言いますが、

こんな物が台湾にいるかと思うと不安でした。内地では動物園にしかない怪物でした。また台湾では半袖、半ズボンの服装で、陣地構築など作業中は皆ふんどし一つでした。それも赤色で現在ではちよつと想像されないスタイルでした。

新竹ではバナナが多く栽培され、台南の山の中では在来のパインの林が多くありました。新竹の湖口の陣地構築にゆく小高い山の両側には、陸軍のプロペラ付の飛行機が点々と松の木陰に隠されていました。そして山を上り、湖口の川口が見える所に、我が分隊は陣地構築にとりかかりました。昭和二十年八月十六日終戦を知りました。その時は本当に、今まで絶対日本は勝利すると信じていた心の糸が切れ、分隊一同皆で涙ぐみました。そして砲と共に山を降りました。

五 終戦・復員

今次大戦で小中学校同級生、元氣者だった仲良しの友が、国のために大切な命を捧げ、結婚の経験もなく、あの世に喜んで逝き、戦死した犠牲者

の方々には、謹んでご冥福をお祈りするのみです。そして戦争の哀れさをしみじみ味わい、残り少ない人生を私の軍隊生活の歩みを糧として大事にしてゆきたいと思います。

久留米の面会時などでの両親の慈愛、中等教育を受けさせてくれた親に感謝して、郷里に帰って来られた事が何よりの幸せでした。そして恩欠連盟の世話が出来ました。

復員していつも思うことですが、本当にあの時基隆港に上陸していたからこそ命もあり、軍隊生活も一年で、二年目からは班長として待遇も良かったと思います。そして三井の会社に入社して、物品販売と福利の仕事に従事し、その後店長や総括担当部長まで命ぜられたことは、私の軍隊経験が多いに利用された結果だと思えます。本当に心から人生に感謝の言葉を表したいと思っています。

そして恩給をもらっていない旧軍人軍属のお世話をし、会員二百人の名簿作成、そして国会議員、県会議員、市議会議員の方々との人間関係も出来、

人様に喜んで頂き、役立つ仕事をさせていたただきました。信じられ頼られる人となり、有り難い人生を送らせて頂きました。

【解説】

体験記筆者は、大正十三（一九二四）年一月生まれ、大牟田市上内小学校を卒業後、三池農業学校の五年間の教育を終了し、昭和十七年徴兵検査の結果、翌十八年一月十日、久留米の西部第五十一部隊に入隊した。この西部第五十一部隊は野砲兵部隊で、一期の検閲を受けて満州の原隊である東寧第二二二部隊（野砲第二十四連隊）へ出発するまでの約三カ月間の初年兵教育の苦労を記している。筆者のその後の軍歴を記すと次のとおりである。

昭和十八年三月 満州牡丹江省東寧第二二二部

隊第三中隊に配属

同 年七月 一等兵、幹部候補生として特

別教育を受ける

同 年十月 上等兵、同じく幹部候補生と

して特別教育を受ける

昭和二十年一月 伍長、独立野砲第五大隊第三

中隊第二分隊長

同 年五月 軍曹、台湾鳳山、台南地区に

て陣地構築

同 年八月 台湾新竹にて終戦を迎える

筆者の所属した満州第二二二部隊は野砲兵第二

十四連隊（第十二師団隷下、剣第八七二二部隊）

で牡丹江省東寧の大城子に駐屯していた。

筆者達は初年兵として内地で教育を受け、大城子に来て野砲兵として砲兵演習、とくに厳寒季や豪雨、泥沼の中での訓練は、重量のある野砲の牽引、馬の扱いなど苦労の連続であった。それでも時には東寧の街へ引率されて外出、しばし娑婆の空気に触れるいっときもあったという。

太平洋戦争戦局の推移につれて、暫時、陸軍部

隊の新編成が困難となり、関車軍からの兵力抽出、

転用、再編が行われるようになった。当初、師団

単位の転用は開戦時の第五十一師団があるだけであつたが、昭和十九年に入ると師団転用も次々と実行され、また大隊単位の抽出も行われた。

このような中で野砲兵第二十四連隊も昭和十九年以降、部隊の動員、移動が行われたという。第三大隊はヤップ島へ、独立野砲兵第十大隊は中支に転用され、湘桂作戦では第三十四師団に配属された後、第十一軍砲兵隊に編入され、桂林攻略戦では第五十八師団砲兵隊を編成、その指揮下に入り、昭和二十年二月には反転作戦で上海へ進出している。

また、独立野砲兵第五大隊及び野砲兵第二十四連隊本隊も台湾へ動員された。そして残留した部隊は「邁進」部隊が編成されたが、結局はソ連軍侵攻によりシベリア抑留を余儀なくされたと云う。

筆者は連隊本隊員として台湾へ動員され、昭和十九年七月二十九日、釜山から「白山丸」にて台湾防衛に任じた。

筆者は終戦直後、基隆港を出発して鹿児島に上

陸、直ちにBHC殺虫剤を頭から振りかけられ全員が真っ白になった。復員列車に乗ると藤田隊長からご苦労と今後の健康を祈る挨拶があり、筆者も分かれて大牟田駅で下車、一面焼野原でかつての市街の面影は消え去つた中を我が家へと急いだという。